

# 監修の序

本書の翻訳の話が出たため本をいただいた。通読して大変感心したのは、徹頭徹尾プライマリ・ケアの立場から骨折治療について書かれていることである。本書の著者は主としてフロリダ大学、オレゴン健康科学大学の家庭医療の医師たちであるがその内容は高度であり、整形外科医の私が読んでも大変参考になる。まず骨折の頻度順位が掲げられている。今まであまり意識したことはなかったがプライマリ・ケアでは手指、前腕骨折がきわめて多く、したがってこれらの骨折には多くのページが割かれており大変実戦的である。往年の高校生のベストセラー「試験によく出る英単語」(森一郎/著、青春出版社)を思い出した。また顔面骨折、肋骨骨折の章もあるのに驚いた。いまだかつて肋骨骨折についての成書を見たことはない。

つまり、骨折の独学には誠によくできた本である。プライマリ・ケア医で完結できる骨折、整形外科への紹介のタイミング、非整形外科医の診るべきでない場合が詳細に語られ、救急の現場で即座に参照できるようポイントは表にまとめられている。骨折の固定期間についてはRCT (randomized control trial) はないので大方、expert opinion (専門医の意見) であるが十分参考になる。

私が研修医1年目のとき、天竜川上流の僻地診療所で医師がいなくなり、静岡の県立病院の内科医が交代で派遣されることとなり、私もお供して僻地診療をはじめて見学した。そこで大変驚いたのは膝の痛み、腰痛、四肢外傷など整形外科疾患の多さだった。

それまで私は外科志望だった。しかし内科、小児科、整形外科の3科がわかれば僻地で遭遇する疾患の8~9割に対応できるなどそのとき実感した。「僻地で役に立つ医師になりたい」というのが私の願いだったから、これを見て整形外科医をめざし、内科、小児科は研修したあと一生独学で知識を広げていくことを決めた。

また数年前、関西のある大都市の外科医会から整形外科疾患の講演依頼を受けた。「外科医会でなぜ整形外科の講義なのですか?」とお聞きしたところ、消化器外科などを専門としてもひとたび「外科」で開業すると診る疾患のほとんどは整形疾患であり、消化器外科の知識、技術だけでなく、整形外科の知識が一番必要なのだとのことだった。プライマリ・ケアの現場で整形外科の知識、技術はそれほど重要であり、この本の価値はきわめて高い。本書により全国の救急医、開業医、プライマリ・ケア医の臨床の大幅な底上げができると確信している。

2022年2月

西伊豆健育会病院 整形外科  
仲田和正